慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュメル時代の都市構成
Sub Title	
Author	井上, 芳郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.9 (1938. 9) ,p.1227(77)- 1280(130)
JaLC DOI	10.14991/001.19380901-0077
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380901-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュメル時代の都市構成

井上芳郎

序

茲でいふシュメル時代とは、メソポタミヤ南部地方に於ける西紀前四〇〇〇——二〇〇〇年間に渉るシュメル人の王朝建設時代を指し、其以後即ち西紀前二〇〇〇年からは、バビロン王朝の樹立となり、次でアッシリア文化の興隆へと續いてゐる。

西紀前四〇〇〇年といへば、現代學界へ知られてゐる限り、最古の文化高揚の時代で、所謂都市國家の初期的成立の時であり、世界文化の温床、東洋文化の揺籃が先づ茲で出來上つたのだ。

然るに、此時代の研究が尙充分でないために、我等の現代生活にまで直接結び付けられる東洋社會の史的發展的研究に對し、其發祥的基礎が明確に把握出來ずにゐる。

數年來、東方諸國の學界を風靡した所謂アジア的生産樣式の問題は、實は隣邦革命支那の本體を捕捉し、併せて全東洋人類の具體的進路を發見せんとする一つの學的運動であつて、之が全アジアの問題としても同じ事だが、結局原始社會への史的基礎研究の缺除のために半途にして足踏みを初め、今に其まゝとなつてゐる。

資本主義進展に伴つて、過去の集團形態が崩壞し、そして其過古の集團形態からふり落された個人的單位が、其

後新たなる樣式の下に新組織されるといふのが、其時代の思想的傾向であつた。

然し此見解は、結局資本主義時代の自由主義思想の上に立つた思想系統であつた。此故にこそ、非自由主義であるべき筈の社會主義――共產主義が、自由主義的人民戰線運動として現はれる餘地が生じてゐるのだ。

我が東洋に於ては、資本主義の未完成が新組織の實現を妨げると考へられたと共に、其資本主義の未完成の故のみが、今迄の社會的結集形態へ結び付けて置いたといはれる、其舊き形態としての血族組織、乃至は――民族主義が、却て、茲に新らしき歩武を整へて其種思想へ反噬を試みてゐる。

我が東洋に於ては、資本主義國家たると否とに拘らず、血族的結集思想が尙頗る强烈である。之こそ我東洋に於ける社會的特質の重要なる內面である。此事は、在來の見解でいへば、資本主義未完成のためであつて、資本主義の完成は軈て其結集形態を分散せしめ終ると見た。しかも此見解は、資本主義が其行くべき道へ必ず側目も振らずに行くものだといふモツトーの下にである。果して然るや否や。

將來、世界の經濟機構が如何なるか、それは今茲で觸れ得る問題でない。唯、私は與へられたる論題の下に、舊きアジアは如何なる歩みを歩み續けて、今日の我が現前に橫はる姿となつてゐるのかといふ其事の史的基礎的究明にかゝつてゐる。即ち之が、全アジアの將來の大道を照らす、正しき光りとなるであらう期待の下にだ。

六千年前のアジアに就いての研究成果は、世界的に見ても今尙頗る微々たるものだ。原始社會の研究以來アジア的生產樣式研究の總本家であつたロシアに於ても、遂に之には一指も染めてゐない。

我國に於て、此方面の論客と認められてゐた早川二郎氏の「古代社會史」が、いしくも此問題を提げて立つた。しかも其資料の一として、過古の井上の小論文が、その隨所に引用された。然しそれは過當に取上げられたものと思はれる。數ならぬ小論を取上げられた事は大に多とするが所論に對しては不滿がある。あの小論は尙其緖にあるに過ぎないものなのに、此重大な論決の要素として取上げられてゐるからである。

今度の小論も、まだ〳〵資料の不足と研究の未熟を嘆かざるを得ない程度のものである。特に資料に於ては、それを外にしては所論の適確性を充分ならしめ得ない點もあるが、時は刻々に進んで行く、今私は出來るだけの事をして置かなければならぬ。そこで本論題のために次の如き順序によつて整理して置いた。

古代都市の如何なるものが知られてゐたか。其等都市の生起した狀態、統治組織と信仰の關係、並に其社會的情勢、次にそれ等の都市國家が次の時代へ移行した情勢的變化といつたものに些か觸れんとしたものである。

一

オクスフォード大學アッシリア學教授 S. Langdon 氏が集錄した Jemdit Nasr 發掘の粘土版文書は、同教授の考定に據ると大略西紀前三八〇〇年のものといはれる。之を發見したのはメソポタミヤ地方ユーフラテス河畔にあるキシ市遺跡の東北十七哩の地點である。

其遺跡及び出土文書は Langdon 教授自身の發掘且つ研究に係り、其文書は現在 Ashmolean 博物館所藏となり、其研究成果は Pictographic Inscriptions from Jemdit Nasr, Excavated by the Oxford and Field Museum Expedition, 1928. として發表し、其集錄謄寫數百九十四個、是等の文書が、是程まとまつてシュメル・バビロン文化を示し得る點でも恐らく最古のもので、同時に、之を世界的に見ても、學界に提出された中での世界最古の文獻集錄といひ得るであらう。

而して、是等の文書を作製した人種は何ものであつたかといふと、その中にバビロン時代の圓筒形封印（シール・シリンダー）と同型の

封印を押捺した跡があり、其印影に現はれてゐる人の人種的樣姿が、明にアッカド人である。然るに、其文書全體の文字及び言語はシュメル系統のものであるから、是等から推斷すると、當時此 Jemdit Nasr の遺跡には、アッカド人が居住し、しかも彼等は南方のシュメル文化を踏襲してゐたと考へられる。

此シュメル人とアッカド人との關係は、之より後、西紀前二七〇〇年代に、アッカド人であるアガド國の國王が、メソポタミヤに於ける南北兩地方を統一し、其國號を「シュメル・アッカドの國」と稱した其稱號の基礎となつたもので、即ちユーフラテス河、チグリス河の河口地帶にゐたのがシュメル人、河の中流地帶にゐたのがアッカド人であつた。彼等は元來其人種系統を異にし、骨格、言語等は瞭然と判別し得る程相異してゐたが、其一方に於て彼等の文化が餘程古くから相互に影響し合つてゐた事も亦明かである。

かゝる現象は所謂「シュメル・アッカド國」と稱したアガド時代から一千年も遡る、西紀前三八〇〇年代の Jemdit Nasr 時代に既に存在した譯だ。しかも、其起源は、尙それより更に遡るものであらう事は推定に難くない。

二

我々は此 Jemdit Nasr 文書によつて、當時の原始的都市の狀態を朧ろ氣ながらも知る事が出來る。といふのは、其中に en-ki 神、babbar 神、en-lil 神の名が見えてゐる事で、由來シュメル及びバビロン地方の古代諸都市では、其各々の都市に獨特の主神ともいふべき神々があつて、此信仰を中心とし都市が統一されてゐた。

上記の中、en-ki 神は「土地の主」又は「國土の主」といふ意味だが、之は「水神 e-a」の別稱である。此別稱の e は「家」、a は「水」といふシュメル語であり、e-a とは水の神殿を意味し、此神はシュメル諸都市の中、最南端の海岸に位置したエリド市の主神で、此 e-a なる神名が、當時尙未だ水境であつた其都市の實情を自ら示してゐる。又、それを en-ki といつたのは、我が「町の神」又は「國の神」といふ意味で、此普通名詞的表現が遂に固定して、エリド市の主神 e-a に對する代表的名辭となつた譯だ。西紀前三〇〇〇年のラガシ國王たるウル・ニナ王時代の文書に、gi en-ki nun-ki といふ語がある(de Sarzec, Découvertes en Chaldée. XXXVII, No. 10)。此中の nun-ki とはエリド市の古稱である。又 gi とは蘆の事だから、前記の句は「エリド市のエンキ神の蘆」といふ意味となり、是等の證據からでも、此神とエリド市の直接關係が判明するであらう。

次に、babbar 神とは bar「光り」といふ語を重ねただけの名で、太陽 utu と同じ文字で表はされ、太陽の光輝方面の表現で、此神はシッパル市の主神であり、此事は西紀前二八〇〇年代のアガド王朝の第三王マアンイシュトスの紀念碑文書に次の如くある。

sippar ki　　シッパル國は(1)
ana napataan　　祭祀のために(3)
il-shamash.　　シャマシュ神の(2)
luggi　　我は指命せり(4)

(British Museum. Cuneiform Texts. XXXXII pl. I. Col. III)

此中の il-shamash とは太陽神に對するセム語で、シュメル語の utu と同じであるから、從つて此文書は此神と此町の關係を示してゐる。

最後に en-lil 神に就てだが、此 lil とは、文字からいふと「戸」である。普通の戸はシュメル語で e といひ、象形は戸であるが、家の意味を持つてゐる。e-a 神の e がそれである。然るに、茲でいふ lil とは、それとは異なり、

Langdon 教授は之を「垣根」といつた。思ふに此語は防壁、障壁の意味で、從つて此神の名も一の禁止的、タブー的意味を有する名であらうと思ふ。此神を風雨の表徴だとする解釋もあるが、それは別な立場からの見解である。此神はニツプル市の主神であつたが、然しシュメル時代を通じ、各都市主神の上位にあり。神々の王としてメソポタミヤ全地方の宗主權を有し、地上の帝王の統治權までが此神の啓示に俟たなければならなかつた程の權威を有した。從つて、此神とニツプル市に關する記錄は無數であるから敢へて擧げるまでも無いであらう。

二

Jendit Nasr 文書に上記の神名の記錄が存在する事から推斷して、當時是等の神々を中心として統一されてゐた都市は勿論、其外にも此種の都市が存在し、それ等各都市相互間に相交通してゐた事が判る。茲では實際の文書から、西紀前三八〇〇年代頃に存在した都市の名を擧げたのだが、更に之と對比すべく、其シュメル時代から既に存在した創世記的年代記の傳承を次に持出して、其中に現はれてゐる古代都市の名に就て檢覈して見よう。

此年代記的傳承は古代シュメルの歴史的年代學の史料としても亦非常に重要なものである。而して、茲に引用する年代記は二種類で、何れもニップル市のエン・リル神殿遺跡から發見したものだ。此ニップル市發見の年代記なるものゝ中、一方は現在ペンシルヴァニア大學博物館の所藏品で、廣さ七吋×八吋、厚さ一吋位の土版文書である。土版原物が數個の碎片に破壞されてゐたのを、同大學教授 Arno Poeble 博士が發見整理し、教授自ら其原文の謄寫を、一九一四年同大學出版の Publications of Babylonian Section of the University Museum. 第五冊の圖版第二、三、四として發表した。しかも此土版には未だ大きな缺損部分の發見が出來なかつたのを、其後 Leon Legrain 博士が多くの土版文書の中から、いみじくも其破片殘缺を發見解讀し、之は一九二二年に同じ叢書の第十三冊第一圖として發表した。

ところが、此ペンシルヴァニア年代記に對比さるべき今一つの年代記があり、之も亦今いつた通り同じニップル市から發見したものだが、此方は、形が前者の平坦な土版とは全然樣式を異にし、八角形の筒で、其八つの面の各々に細かく年代記の文章を書き込んだものである。此八角形筒といふ樣式は、我々には珍妙に思はれるが、バビロンでは他にも例のあるものである。

さて此の方は現在オクスフォード大學と關係のある Ashmolean Museum の Weld-Blundell Collection 中にあり、此 W. B といふ人は此時のオクスフォード大學のニップル市發掘の費用を出した人であるとの事だ。而して此發掘並に其文獻的研究が同大學のアッシリア學教授 S. Langdon 氏の手によつて行はれ、特に此年代記の原文並譯文は Oxford Editions of Cuneiform Texts. Vol. II:- The Weld-Blundell Collection, Vol II. として Historical Inscriptions, Containing Principally Chronological Prism, W-B, 444. といふ名で Langdon 教授によつて發表された。

それで、第一、Poeble 教授と Legrain 博士の年代記と、第二、Langdon 教授の年代記とを比較すると、其内容は兩者殆んど同一であつて、文章までも共通してゐるのだから、其兩年代記の作製は、何れも同一な原資料に據つて爲されたものである事が判明し、特に重要な點は、此兩年代記の末文即ち最後の年代的記載に於ける兩者の差により、此兩年代記の作製年代の相異が判明する事だ。

即ち Poeble 教授と Legrain 博士發見の分は、其末尾にシュメル時代末期のイシン王朝（大約西紀前二一七〇——一九五〇年と考定され、第十五王まで續いた）の末王即ち第十五王のダミック・イリシュの二十三年を以て此年代記が結末となつてゐる。其結末の原文の音譯と日本譯を示せば次の通りである。

damik-ilish	ダミック・イリシュ
dumu sin-magir	シン・マギルの兒
23 in ag	二十三年統治す
15 lugal-ene	十五王等
Mu 225 itu 6	二二五年六ケ月
in-ag-eš	統治す……

とあり、此結末の最終年は大體紀元前一九五〇年と推定される。然るに之に對し、Langdon 教授發表のものは

Sin-magir	シン・マギル
mu 11 ni-ag	一一年統治す
13 lugal	一三王
mu-bi 213	其年代二一三
qat Nur-Ninshubur	ヌル・ニンシュブルの手寫

とあり、後者のシン・マギル王が前者のダミク・イリシュの父王である事は前引原文の通りであつて（後者の文中、十三王とあるのを Langdon 教授は十四王と訂正したが、玆では原文の儘にして置いた）之によると Langdon 教授の方の年代記は父王の代に書き上げられ、Poeble 教授 Legrain 博士のものは、同じ資料によつては居るが、それより遲く次の子の代に作製され、しかも父の年代記の後に、自分の代までの年代を書き加へてある譯だ。だから兩方の記載年代が、一方はイシン王朝第一年から二一三年目となり、他方は二二五年目となり、從つて兩者の作製年代の差が丁度十二年である事が明確となつてゐる。かくして見ると、此年代記作製當時には、充分信憑せられてゐた一定の資料が存在した事が推定される。

三

ところで、此年代記の最初の部分を見ると、其悉くが創世記的神話的なもので、開國當初に大洪水があり、其大洪水を境として大體其性質を二つに分ける事が出來る。即ち大洪水以前の年代計算は、丁度日本の神代に對する僞史・舊事記の如く荒唐無稽な天文學的年代を附してゐる。今大洪水以前にあつたといふ都市即ち其王朝と年代を示すと次の通りである。

一、エリド市	六四八〇〇年
二、バデビラ市（バド・ウルヅ・ナガル市）	一〇八〇〇〇年
三、ララク市	二八八〇〇年
四、シッパル市	二一〇〇〇年
五、シュルパク市	一八六〇〇年
計	一二四一二〇〇年

といつた有樣で、しかも此長い年月の間を八人の帝王で統治した事になつてゐるのだから、一人平均三萬年生きてゐた事になる。しかも此時に起きた大洪水といふのは、別に大洪水傳說といふものがあり、それが舊約聖書創世記のノアの大洪水の始原的傳承であつて、此大洪水により一旦人類が絕滅し、次に新らしい人類が出現するといふのだから、此大洪水以前時代は丁度我國の神代の神話の如きもので直接の人類歷史と見得べきでない。但し、上述の

五都市は、別傳の大洪水傳說の都市と合致し、何れも古都市の建設時代の記憶を辿つてゐるものと思はれる。

次に、大洪水以後に出來たといふのはキシ市とウルク市の順序となつてゐる。然し此兩市に興きた王朝も尙傳說的性質を離れず、キシ市の王朝は二十三代で二四五一〇年三月三日半となつてゐるから、一代約二千年に當り、次のウルク市の王朝も、十二代で二三二〇年といふのだから、一代約二百年に當る。

然るに、此以後、即ち次のウル市に興つたウル王朝からは、それ迄とは全然異つて、確然なる歷史的事實として現はれてゐる。

ウル王朝の年數は四代で一七七年となつて全く人間の壽命らしくなつてゐるが、それより、より重要な事は、最近、一九一九年並に一九二二年以後に於て、此ウル市の王城の遺跡を發掘して、此年代記に記載されてゐる通りの王の名を刻した遺物や、其王の子が建てたといふ墳墓や神殿などを發見したので、今迄此王朝の年代記に關しても矢張神話視してゐたのが、俄然、之が歷史時代の實在的人物の名であつた事が證明され、其結果、其發掘遺跡並に年代記等を併せ研究した結果、此王朝を大體西紀前三二〇〇年頃と考定した。而して年代記にあるウル王朝を第一王朝と呼んで次の王朝と區別してゐる。

ウル市以後から、實際の遺跡に現はれた考古學的、歷史學的事實と交渉が生じて來たが、然らば、此推定年代である西紀前三二〇〇年より以前に都市的構成が無かつたなどゝいふ迂遠な疑問は勿論發せらるべきでない。何となれば、此ウル市の第一王朝時代と雖も、既に非常な高度の文化に到達してゐた事が其遺跡から證明出來るのみならず、それより以前、此メソポタミヤ各地方には幾多の都市が存在したのは勿論、只それが、年代記の記載と具體的な合致がないといふ丈で、現に冀にも擧げた通り Jemdit Nasr の遺跡などが、西紀前三八〇〇年代と考定されてゐる位だから、それだけでも、ウル市以外の古代都市の存在に就て贅言を要しない。

只年代記に擧げてある都市は、最も古く建設された地點の傳承的殘存として茲に引用した譯だが、しかも世界の多くの學者も亦、早く茲に着眼するところがあつて、是等の名と關係があると思はれる地點を既に一々發掘調査してあるのだ。

四

それで、シュメル・バビロン地方の開國年代記としては、尙他にあり、之も矢張 Weld-Brundell Collection 中で第六二號と番號の附いてゐるものは、前に擧げた年代記と大體同じだが、只其創世第一都市が、前のものではエリド市となつてゐるのに對し、六二號年代記は、第一都市 Habur、第二都市 Ellasar となつてゐる。尙此外に、遙か年代が後れて、西紀前二六一—二四六の頃の人で、バビロン市のベル神の僧侶 Berosus によつてギリシヤに傳へられた年代表には、第一都市が Babylon となつてゐる。各年代記の、かういふ相違は、その年代表の資料となつた原の傳承が各々其徑路を異にしたからで、南方のシュメル人の間に傳へられた年代記はエリドを第一都市とし、（W. B. 62. 年代記の第一都市 Habur は原字は Ha-a と書き、水中の魚といふ意味で、やはりエリド市の事である）而してバビロンを第一都市とするものは、前者に比し後代のもので、バビロン系統の傳承から出たから、其第一都市を自己の市に持つて來たと認められる。

さて、是等の年代記的傳承の出所は何れとしても、是等並に其他の資料に據つて、古く知られてゐた都市にして本論に關係あるものを擧げ、先づそれをシュメル人とアッカド人の都市に分けて見る。

シュメル族（東南地帶）

エリド市
ウル市
ラルサ市
ラガシ市
（バド・ウルヅ・ナガル市）
ウルク市
シルパク市
ララク市
アッカド族（西北地帶）
キシ市
バビロン市（セム族）
シッパル市
アガド市

此都市の配列は、河口地帶から順次中流まで遡る順序となつてゐる。尙此中、シュメル都市の中 Bad-urdu-nagar といふ名があるが、之は「銅工人の城壁」といふ意味で、Langdon 教授は、之を Bad-tibira とセム語風に讀んでゐるが、此 tibira は金工の事で同意である。此市は、Poeble 教授の大洪水傳說の方で、第一都市のエリド市の次に第二都市として記されれる Bad-nagar-dis-ki に當るものと思はれるが、然し同教授は此都市の所在を不明だといつてゐる。（Peoble. 前引叢書 Vol. V. 43 p.）

然し、西紀前二二〇〇年代の larsa 國の王 Sin-idin-nam の文書（Cone A）に

Kalam-e-ag-ag-de Bad-urudu-nagar ki

といふ記事があり、之は Bad dur-gurgurri と譯され（Peoble, Vol. V. 122 p.）此所では、要塞即ち Bad の名として記されてゐる。王は此要塞を太陽神タムムズ神の都市に築いたものである。而してタムムズ神に就ては後にいふが、年代記に據れば、此神は Ha-a 市の生れで、此名も亦エリド市の事である。

又 Poeble の前引叢書第五冊の第一五七圖版に、バビロン古都市と其主神を記載した楔形文書の謄寫が出てゐるが、其中に

Bad-urudu-nagar-ki e-ninni kalamma

と記した一行の記事があり、之は「世界のニンニ女神の神殿のある銅工人の城壁都市」と譯さるべく、而してニンニ女神とは月神の配遇神で、ラガシ市に祀られてゐた。

何れにしても東南方の諸都市なるエリド市、ラガシ市、ラルサ市は皆早く銅器文化の中心であり、發掘の結果からいつてもラガシ市近傍のテロやウル市の遺蹟からも銅器の遺物が澤山出てゐる。メソポタミヤ地方では銅は輸入に待ち、アガド時代にはスサから輸入したと王の文書に記錄されてゐるが、多くは地中海のキプロス、シナイ半島マガンから輸入され、シュメル各都市は其製作が餘程進步してゐた事が證明せられてゐる。此點からいつても、前に擧げた銅工の城砦たる Bad-urudu-nagar は南方シュメルの一都市であつた事は確かといつて良しからうかと思ふ。

五

キシ市に於ける發掘は、一九二二年來オクスフォード大學ウェルド博物館及びフィールド自然史博物館共同の下に繼續發掘して居り、又ウル市及び同市遺蹟を距る四哩のアル・ウベードに於ても、一九一九年に大英博物館のホール氏が發掘し、一九二二年以來は大英博物館が米國ペンシルヴァニア大學博物館と共同で發掘してゐる。

幾度もいつた通り、キシ市は兩河地方の西北方即ち中流地帶で、アッカド人の勢力圏を示し、それに反してウル市は、東南方の河口近くにあつて、シュメル人の勢力圏であつたが、此事は別として、此兩都市遺蹟の發掘の結果、西紀前三〇〇〇年から遙かに遡つた昔時に於いて、大きな洪水があり、そこで、それ以前の文化は一時殆んど絶滅に歸した形迹が見える。

特にウル市の如きは、その大洪水以前の土層から、シュメル人以前の先住者の石器文化の迹を見る事が出來、彼等は其所で原始的ながら農業、牧畜、漁業を行ひ、其末期頃にシュメル人が混入した痕跡が存在する。そして其後になつて大洪水の襲來に遭遇し、それ等の文化が一時壞滅に歸してしまつた。しかも大洪水の迹を示すところの押流されて來て堆積した泥土は、一面に九呎からの厚さを示し、如何に其當時の洪水が長期且つ激烈であつたかを想像せしむる。

此大洪水は、前にいつた年代記の大洪水の記載とは、元より直接に結付けて考へる必要はない。只かういふ災害が度々起つたであらうから、あゝいふやうな神話や傳說の出來るのも無理からぬ事が充分理解される。從つて、年代記にあるやうに、大洪水によつて其前の歷史が一時湮滅し、住居が又新に作られるといふやうな事も、原始的な村落形態では恐らくあり得たであらう。年代記に於ける洪水以前の都市や王朝が、悉く神話化されてゐる理由の一端も亦推察出來る。

大洪水以後の都市と王朝が、キシ市、ウルク市、ウル市の順序になつてゐるが、之も亦寧ろ半歷史時代ともいふべき狀態で、只之を最近の考古學的調査と對比して側面から證明し得べきであらうが、本論に於ては發掘調査の報告は目的でなく、只それ等を通して見たる都市構成の概觀と其時代の社會的機構への考察を必要とするのだから、先づ第一に、發掘都市に於ける中心勢力者としての帝王的記錄を拾つて、其統治者の原始的性質の究明と其推移とを檢覈する。

六

シュメルに於ける帝王的記錄の最古のものはウル王朝（西紀前三二〇〇年）であらう。それは、ウル市のアル・ウベード遺蹟から發掘した、ニン・ハル・サグ女神の神殿の建造者が、其神殿建造を記念すべく其礎石の下に埋藏したものである。材料は大理石で、古い時代の特徵たる中高の板になつてゐる上に、文字は、未だ楔形文字に變化しない原始時代の線書き字體を以て刻してある。其內容の音譯及び日本譯は次の通りである。

1 dingir nin-hur sag	聖ニンハルサグ女神に
2 a-an-ni-pad-da	アアンニパダ
3 lugal uri ki	ウル國の王（にして）
4 dumu mes-an-ni-pad-da	メス・アンニパタの兒、
5 lugal uri ki	ウルの王（なり）
6 dingir nin-hur-sag-ra	ニンハルサグ神のために

7 e mu-na-du　　神殿を建つ

とあり、此中にアアシュ・パダ王の父として記されてゐる mes-anni-padda といふ名は、年代記中にウル王朝の第一王として出てゐる名と同じである。年代記の共部分を引用すると、

Col. III

39 uri-ki-na　　ウル國に於て

40 mes-an-ni-pad-da　　メスアンニパダは

41 lugal-am mu 80 ni-ag　　王として八〇年統治す

42 mes-ki-en-dingir-nannar　　メスキエン聖ナンナルは

43 dumu mes-an-ni-pad-da　　メスアンニパタの兒（にして）

44 lugal-am　　王たり

45 Mu 36 ni-ag　　三六年統治す

上記の中、左端に Col. III 39-45 と記したのは、オクスフォード大學プリズム年代記原本の第三面の三九行から四五行までに此文章が記されてゐる事を示すものだ。而して此年代記中、ウル國の第一王の名 mes-anni-padda といふ名が、ウル市で發掘された神殿建設者たるアアンニパダの父の名と等しい。只年代記の方ではウル國の第二王は、此 mes-anni-padda 王の兒 mes-kien-dingir-Nannar となつてゐるが、實際の發掘品の方では mes-anni-padda 王の兒 a-anni-padda となつてゐる事が相違する。

尚、玆で特に注意し度いのは、是等の遺物の中に lugal といふ帝王の稱號と、pa-te-si といふ宗教主長者の兩方の稱號を併せ有する統治者の存在を、證明する遺物が發見された事である。此事は、豫て世界の諸學者から、其時代の統治者としての帝王の性質を闡明する上に重大なる資料となるといふ理由の下に、此稱號の兩方を兼ねたのは、何時からであつたかと注意されてゐたのである。

其遺物といふのは、前に記したアアンニパダ王が建立したニン・ハルサグ神殿の階段最下の踏段の前にあつた石花石膏の碗のふちの缺けたものだ。それに記された句は斷片で、

1 lugal……

2 pa-te-si……

3 kish (?)……　　(Hall & Woolly. Al-Ubaid 80 p. 126 p.)

と三行に記されてゐるが、何分にも缺損してゐるものだから辭句の以下が不明である。（發掘番號 T. O. 220）

單に之れだけでは、殆んど眞相を捕え難いやうだが、字體や伴出物から見て、アアンニパダ時代と同じ時のものと推定出來やう。勿論之は極めて小さな細片で 0.05 × 0.022 m. あり、尚恐らく之と同じもの〻一部だらうといふものに 0.033 × 0.011 といふ小片があり、それには

1 dingir en……

2 ki……

とある（T. O. 219）。

餘り細片で些か心元ない點がないではないが、兎も角からして見ると、我々が新に發見したシュメル最古の帝王記錄に、既に帝王の稱號として、lugal と pa-te-si なる兩稱號を同時に稱へてゐたといふ證跡を握る事が出來た譯

だ。

七

茲で帝王の稱號を問題とするのは、其名から帝王的性質の原始的意義を求めて、その名稱から來る研究の結果と、他の各般からする研究の成果との間に如何いふ關係を示すか、即ちそれを以て自分の論斷の正否判斷に資さうとするものである。

第一の lugal といふ言葉は lu(人)、gal(大ナル)(高き)といふ二語の複合名詞で、シュメル語では、形容詞が主語たる名詞の次に來る語法であるから、從つてかういふ語形の儘で新らしい熟語となつたものである。然し字形は象形であるから、gal といふ象形の「羽冠」が lu といふ人の頭上に加へて描かれゐる。だから字形のまゝを二語として讀めば gal-lu となるべきだが、語として、即ち讀み方としては lugal となつてゐる。元來二つの語が結合して新しく出來上つた語であるから、言語の進化の跡からいつても既に原始的な性質を表はしてゐない事は明かであらう。（之を gal-lu と讀んだ例外的實例もあるが、今は觸れない。）

此 lugal といふ語が、西紀前三二〇〇年代の第一ウル王朝時代に於て、既に「帝王」としての意義を有してゐたが、此文字並に此シュメル語は、シュメル時代の末期即ち西紀前二〇〇〇年の、セム族の帝國バビロン王朝出現まで、シュメル語として繼續存在した。尚此文字は、シュメル語として通用したと同じ時代に、西北方に居住したアッカド人によつて借り用ゐられ、文字は其儘だが讀み方をアッカド語によつて sharru とした。此方の文獻的證據は、西紀前二五〇〇年のアッカド王朝第一王サルゴン大王の時から現はれ、更に其後の西紀前二〇〇〇年のバビロン王朝のバビロン語としては、アッカド語と同系のセム語であるから、同じ語として繼續使用され、其次のアッシリア時代から西紀前五三八年までの新バビロン王朝までも同樣であつたが、此文字は、最後にインド・ゲルマン語として讀まれ、ペルシャにまで踏襲された。但し、字形は漸次線狀的象形文字から楔形字形に移り、更にそれが同じ楔形でも非常な省略形となつたが、根源的形態は少しも失はれなかつた。

さて然らば、西紀前二〇〇〇年までのシュメル時代に lugal といふ語に對する「帝王」といふ意味は果して此文字の原始的意義であつたかといふと、文獻的證跡としては前にいつた通り、帝王的意義を以て表はされたものが最も古いのであるが、然し語の意味からいつて此帝王的意義より、もつと原始的なものがあつた筈と推定される。

西紀前二五〇〇年頃のシュメルの法律で Luts 氏によつて集錄されたものがあり、その集錄第六條で奴隷の所有者を同じく lugal といひ、其字形も帝王を意味したものと全然異るところがないに拘らず、其語の內容が全然帝王的意義を有せず、單なる一般民衆の「主人」としての意味だけしか存してゐない。今その實相を示すために第六條法文の全文を示す事とする。

第三列

3	tukundi bi	若シ
4	ir lu sag	人ノ奴隷ガ
5	lugal a-ni-ir	ソノ主人ニ
6	nam ir da-ni	奴隷タルコトヲ
7	ba-an-da-uru	拒マバ
8	lugal a-ni-ir	ソノ主人ハ

9　nam ir da-ni　奴隷タルコトノ
10　a-ra 2 kam　二倍ヲ
11　un-ga-in　定メ
12　kish bi　ソノ額ニ
13　al-gir-e　劍ヲ科ス

（此法文の楔形原文及び逐語譯並に其論究は法學研究第十五卷第四號所載、井上の論文「シュメルに於ける家族制度」に出てゐる）

此法文中 lugal とは其奴隷の所有者であるから、シュメル人として單なる普通人に過ぎない。尙かく「主人」としての意味の外に、之をバビロン又はアッシリア時代の對譯語に照らすと、バビロン語の maliku 即ち顧問、評議員の如き性質をも有し、又 sailu と譯されて質問者、訊問者、或る場合は「說明者」の意味となる。之等を通觀すると、要するに「長老」「長者」「先輩」がその原始的意義で、彼等は老人或は長上としての社會的經驗者の地位から、軈て社會的統治機關となり、之から漸次主長者的統率者的地位にまで興隆して行つたものと推定される。

尙、前述の年代記に據ると、開國當初から既に統治者としての lugal なる帝王的地位が現はれてゐるが、之は此年代記作製時代に於ける社會制度から導かれ、かゝる遡及的名辭の使用となつたものと考へられる。尙之に就いては後項の en に就いての所論を參照ありたい。

次に Pa-te-si といふ語も、亦ウル第一王朝の殘缺的文獻に lugal といふ語と共に表はされてゐるから、主長者的地位に於て Pa-te-si と lugal といふ二つの地位の中、何れが原始的なる發生的起源を有するかを、文獻的資料から求める事が出來ない。そこで、此 pa-te-si といふ語に就いても一應その語の有する內容の意義を吟味する。

モノシラビックとしての言語的特徵を有するシュメル語の構成上、此 pa-te-si といふ語にも、其內容をなす一語々々に別々の意味があり、又此三語が結合して第二次的新意義が生み出されてゐるところは、前に出した lugal が二語の結合語であるのと等しい。

pa-te-si を二語々々に分解すると pa は二本の樹の枝の象形で、恐らく權標の表現であらうが、言葉の意味は「高官」「監督者」等々である。te は土壇、si は建造又は建造者である。此中、「土壇」とは神殿の中心となる高塔の基礎であるから、總括すると神壇を築く監督者の意味となり、先づ神に奉仕するものゝ地位から、神殿建造主裁者となり、結局、神の奉仕者としての最高位置を示す語となつたものであらう。

シュメル時代初期に於ては、王者が同時に神壇築造者であつた事は、西紀前二九〇〇年のラガシ王朝第二王ウル・ニナの有名なる家族群像によつて明かである。

此像は、ウル・ニナ王自身が、家族の先頭となつて、自ら其頭上に土を滿した籠（シュメル語で zush といふ）を載いて神壇建設のために運び、後から家族達がつき從ふところを描き出してゐる。之は自ら家族の主長者として之を統率じつゝ神に參ずるの意味で、其所には次の如く記してある。

ウル・ニナはラガシ國の王（ルガル）にしてグニドの兒なり。ニン・ギルスの神殿を築き、小さき深淵を穿ち造りたり。ニナの神殿を築きたり。

兒アニタ、兒リッダ・アクルガル、兒ルガル・エゼン、兒アニクルラ、兒ムインニクルタ

とあり、此家族的記錄は其家系を示す大切な資料ともなつてゐる。此圖にはウル・ニナ王自身を lugal と呼んでは

ゐるが patesi とは呼んでゐない。然し、此ラガシ王朝では皆 lugal と patesi の兩稱號を併用してゐた。故にウル・ニナ王の孫なるエアンナツム王がニン・ギルス神に献じた記錄にも明かに此事を記してゐる。

ラガシのパテシなるエアンナツム（略）ニンギルス神より辯才を與へられ、エアンナツムはヴンムッシュ神のためにチラシの神殿を建つ、王はラガシのパテシなるアクルガルの兒にして其祖父はラガシのパテシなるウル・ニナなり。云々

かくの如くウルニナも亦パテシであつた。そして patesi といふ稱號は初めは宗教主長者の稱號で其主長者自身も亦神聖であつたが、是等のパテシを主長者とする各都市が互に呑噬する時代となつてからは、一方のパテシが一方のパテシを征服するといふ現象が發生し、遂には敗者たるパテシが其地位を失ひ、或は其パテシたる地位を其儘に他の都市のパテシの下に從屬するが如き狀態が現はれて來た。

そこで、其征服者としてのパテシが、その下に從屬するパテシに對し、自己を誇稱するがために、遂には其處に大パテシ pa-te-si gal といふ稱號が現はれて來た。

更に、勝者としての都市主長者が、神の奉仕者たるの地位を離れ、純然たる政治的統率者として單なる lugal といふ稱號を專稱するに至つて、patesi とは此意味の lugal に從屬する副王的地位を現はす名目とさへなつた。

西紀前二五〇〇年代のアガド國第一王サルゴン大王のアッカド語の文獻では、同じ patesi といふ文字を isshaku と讀んでゐたと認められるが、之れ亦副王又は從屬都市の主長者の地位を示しゐた。かうした變轉の結果、此名は最後に、一の官吏的地位を示すだけの名となつてしまつた。

今アガド國の記錄を採つて其實例を示す事とする。

アガド國の王サルゴンはウルク市の（五行破損）五〇人の isshaku 等及び……王等を彼の手に服從せしめたり

アガド國王サルゴンは、イシュタル女神の忠實なる支配者にしてキシ國の王、アヌ神のパセン官、地上の國々の王、エンリル神の isshaku なり。

戰に於てはウルク國を倒し、又サバ神の武器を有する五〇〇人の isshaku と其町々を服從せしめたり。

とあり、此記錄では大王が一人にて大パテシとルガルを兼ね、他のものを指す場合、大體神に使へる地位の主長者を patesi 又は isshaku とし、都市の主長者を lugal 又は sharru といつたが、王の方は征服されるや、直に其王號を褫奪された。故に被征服者には lugal といふ稱號を見ず、只 isshaku 即ち patesi と稱するものあるも、之は前にいふ通り副王又は從屬的諸侯の地位を示してゐた。又サルゴンの兒のナラム・シン王の記錄に

アヌ神のパシス職、エンリル神のサカナック職、アブ神、ザババ神の isshaku なるナラム・シン、大王（sharru dannum）アガド國の王、四方の王、イシュタル女神とアヌニト女神の光輝に浴するもの云々

とある。

patesi の項を終るに際し、再び年代記に復へるが、年代記で lugal といふ稱號が創世當初から其統治者に與へられてゐる名だが、patesi といふ稱號は遂に此年代記の中に見出す事が出來ない。

九

年代記に於ては、pa-te-si といふ名は見出し得ないが、此 pa-te-si に代るらしい名が別にあり、それは en といふ名辭である。大洪水以後キシ王朝に次で興つたウルク王朝の出現に際し、第一王メスケムガシェル王に對し此稱號が次の如く記されてゐる。（年代記第二面以下の數行）

Col. II.

45 kis-ki gis-ku ba-an sig　キシ國は武器により倒され

46 nam-lugal-bi E-anna-su　王權はエ・アンナに移り

47 E-anna-ka　エ・アンナに於て

Col. III

1 mes-ki-em-ga-she-ir　メスケムガシェル

2 dumu dingir babbar en-am　太陽神の兒にしてエンたり

3 lugal-am mu 300 + 25 ni-ag　王たり、三二五年統治す

尙之と對比すべく、Poeble の年代記から同じくウルク王朝の部分たけを引く

Col. II

3 e-anna ka　エ・アンナに於て

4 mes-ki-in-ga-she-ir　メスキンガシェル

5 dumn dingir Babbar　太陽神の兒にて

6 en-am　エンたり

7 lugal-am　王たり

8 325 mu ni-a　三二五年統治す

兩文は些少の差だけで殆んど一致してゐる。而して此文中、新に興つたウルク市の第一王を太陽神の兒といひ、同時にエ・アンナのエンと呼んでゐる。

此エ・アンナといふのは、アンナ神の神殿の事で、此ウルク市の主女神アンナを現はしてゐるのだから、從て王は其女神殿のエンである。

en に就ては、Langdon 教授は之を high priest と譯してゐる。そして此 en といふ地位が年代記中の此ウルク王朝の記事に今一度現はれて來る。それは此第一王の次のルガル・バンダ王の後に立つたギルガメス王に關するもので、此ギルガメス王の父が矢張 en であつたと記されてゐる。

Col. III

12 dingir lugal-banda sib　聖ルガル・バンダ

13 mu 1200 ni-ag　一二〇〇年統治す

14 dingir dumu-zi shu ha-gunu　聖タムムズ、漁人なり

15 uru-ki-ni ha-bur-ki　其町はハブルの國なり

16 mu 100 ni-ag　一〇〇年統治す

17 dingir gis-bil-ga-mesh　聖ギルガメスは

18 ab-ba-ni lil-la　其父は白痴にして

19 en kul-ab-ba-ge　クラブのエンなり

20 mu 126 ni-ag　一二六年統治す

以上は Langdon 教授の年代記に據つたものだが、Poeble 教授の年代記も殆んど之と同文である。

尙茲にあるkul-abとは、「ウルク市と同種」でウル市の舊稱であるからギルガメス王の父は其のエンであつた譯だ。年代記以外の實際の帝王記錄に之を求めると、同じウルク市の王 lugal-kigub-nidudu 王の文書に其王位をエン・リル神から與へられたといふ記錄がある。

4. ud dingir en-lil li　　聖エン・リル神の時に
5. gu zid e-na-de-a　　彼(神)は忠言を與へ
6. nam en　　エンたり
7. nam-lugal-da　　王たるべく
8. e-na-da-tab-ba-a　　彼は約せり

此王の名が年代表に洩れ、尙聯絡を得べき手がゝりがないから、其年代的決定を見ないが、キシ市の第二王朝の頃即ち西紀前三〇〇〇年前後に入るべきものと考へられる。而して此記錄中、(エンたり王たるべく)とある原文は、年代記のキシ第一王朝第一王の記錄と全然同一形式である事に注意すべきだ。

シュメル初期の王エン・シャクシュ・アンナの文書にも出てゐる。

1. dingir en-lil　　エン・リル神よ、
2. lugal kur-ra　　世界の王
3. en-sha-kush-an-na　　エン・シャクシュ・アンナ
4. en ki-en-gi　　シュメル國のエン
5. lugal kalam-ma　　大地の王

此文書に「シュメル國のエン」とあるが、シュメル國即ち ki-en-gi とはシュメル人の總括名で、かゝる特別の都市がある譯でない。poeble 教授は之をニップル市の事であらうといつてゐる。

さて以上に引用した分では、特に en-am lugal-am とある「エンたり、王たるべし」云々といふ形式は、前に擧げた lugal にして patesi を併せ稱する事と全く符節を合せたる如くである點からいつても、茲で lugal と併稱される en が、恰も lugal と併稱された patesi と其關係を同じくするものとさへ考へられるではないか。が然し、之に就いてもう少し其例を見よう。

en といふ言葉が最も早く現はれてゐるのは、やはり Jemdit Nasr 文書で、Langdon 教授の報告全部一九四個の中に六十四個に出てゐるから殆んどその三分の一に當るといへる。

尙、古帝王の名の中に此語が入つてゐるのも亦頗る多く、之に就ては特に Poeble 教授が前引の書中、年代記に現はれたる帝王の名の意味を解釋し、やはり en を Langdon 教授と等しく high priest と譯してゐる。(Vol. V. 115 p. 154 p.)

en はバビロン語に譯した場合 belum 所有者、baalu 生長、sagan 質問、shemu 天、sharru 王者等の意があり、大體に於て lugal の譯語と共通する。

字形からいへば Deimel は其著 Sumerische Lexikon に Das Urbild dieses Zeichens ist eine Feldschenna mit einem hölzernen Turm. といつてゐる通り、字形は高樓であつて、名詞はその儘「高樓」、形容詞、副詞、動詞は何れも「高きに上る」意味に働いてゐる。其所で、「高きもの」「主公」「主長者」等の意味と共に、顧問、說明者、質問者の意を有し、神官又は僧尼の地位に近いものとなつてゐる。

一〇

シュメルの信仰上に於ける神人交通の方法は、傳承の上で屢々語り殘されてゐる通り「夢」と「神託」であつた。

夢が原始人の間で、人と靈魂との交通に重要なる役割をしてゐる事は、原始信仰を研究するものゝ等しく認めてゐるところである。曩に擧げたシュメルの創世記的年代記と同一關係にある「大洪水神話」に於ても、帝王 Ziugiddu が天神 an と地神 en-lil の託宣を夢によつて知るといふ事となつてゐる。

又大洪水神話と連結する「ギルガメス帝王傳說」には、ウルク市の古帝王にして人類の祖先であるギルガメスが冥界へ行つて神の宥助を乞ふ時に、夢で死せる自分の母 nin-sun と會つて彼女を介して神へ近づいてゐる。

シュメルやバビロンに於ても亦、夢がかくの如く信仰の世界に重要な役割をなしてゐるが、尙、西紀前六六八——六二六のアッシリア王アッシュルバニパルが建てたニネベ市の圖書館跡から發見した多數の占術記錄の中、此夢占に關するものが夥しく存在してゐた。此事はバビロン地方で古代から此時代に至るまでも「夢」そのものが一の信仰的形式として有力なる方法であつた證據となる。

茲でいふ夢占といふのは、別な意味でいふと神の託宣を聞く一つの方法に外ならない。此夢の中で祖先を通じて神と結合するといふ事も、亦一の大切な信仰的要素であつた。ギルガメス傳說では、ギルガメスが母親を通して神託を受け、大洪水神話では、人類の大祖ウタナピシュテムが夢で神から洪水の豫報を受ける。此ウタナピシュテムは神話では現世に生きてゐるものとして神に接してゐるが、此神話を語り傳へるものからいへば、矢張祖先ウタナピシュテムは、冥界の祖先として神人間の中介者たる地位にあつたのだ。

此種の思想は、人が死すると冥界の祖先の所へ行き、半神半人となり、神と、生きてゐる人間の子孫との間を仲介し、靈魂の世界と現世との連鎖となつて人間の運命を守護すると信じたのだ。そして先に死んだもの即ち古い時代の祖先は古い程神に近くなり、遂に祖先自ら神となる。之れは明かに祖先崇拜の一つの顯はれであり、又かくして、神より直接に繫がるところの祖先から出でゝ、次々に生を現世に受けるものと信ぜられたのだ。即ち此事は生きてゐる人間自身が、神の直接の末端であると見做さるゝが故に、人間の現身そのものが、亦神の直接の子であるとの觀念として現はれる。其結果、現身それ自身が神であるとされ、それが人間的權威と結び付き、遂に帝王崇拜思想の如きものも其思想の上に成立して來る。

シュメルに於ける此種の思想は、西紀前二五〇〇年代のアガド王朝にも行はれ、帝王は自ら神なりとして直接の禮拜を人々に命じた。又西紀前二三〇〇年のウル王朝、西紀前二〇〇〇年のバビロン王朝にも亦此思想が現はれてゐる。

一一

次に、神と人との結合のために、更に重要なのは「神がゝり」の狀態で神託を宣べる形式で、之には音樂や舞踊なども其中介の役目をした。是等は主として女性の仕事であつた。文獻時代には女性の地位は既に低くなつてゐたが、それでも西紀前三〇〇〇年代のアダブ國の patesi に kisal-si-gal といふ尼があつた事は注意に値する。

イシュタル女神の神殿には多數の女巫が仕へてゐて、呪法を行ひ、神託を聞き且つ人々にそれを傳へる役目をしてゐた。此事が女神の讃歌の中に見えてゐる。

神は其歩みを、神婦の元に枉げ
イシュタル女神は、神婦の下に眞直に行つた

織り女は、その寢臺の上に坐してゐる
白い糸、黑い糸、二本縒りの糸、紡錘、紡いでゐる
不思議の糸、強い糸、斑の糸
糸は呪詛を解きほぐす

（楔形字原文並に逐語譯は、法學研究第十六卷二號の井上所論に出てゐる）

イシュタル女神の神婦は惡魔を攘らふために呪術を行ひ、糸はそれに使ふための魔除けである。彼女等が平常、神殿内で紡織の事などに携はつてゐたであらう事から、かういふ呪法の形式なども生れたものであらう。

呪法を行ふ事や、神憑りや、神託を受けるなどは、神婦の仕事といふよりは、女神自身の仕事とする方が根源的信仰で、神婦は只之を身に移すものとのみ思つてゐたらしいが、要するに、之は婦人の原始時代に於ける社會的地位の反映に外ならない。

ラガシ市の patesi たりしグデア王（西紀前二四〇〇年）が、自己の命運を知るために神託を受ける事が王の文書の中にある。――此時も亦夢の事を母から解き聞かせて貰ふといふ古い型の信仰形式を採つてゐる――

「眞夜に一事實起り、之を解する能はず。我が母にその夢を問ふ
おゝ聖なる神託者よ、誰が我に適するかを知るや。おゝニナ女神よ。シラクの土地の女神よ、我に降り憑り來れ、その意味を解け。
かくて、舟に乘りニナの運河を通りてニナ女神の町に行く……」

此神託を神から受けて人に告げるものがニナ女神自身となつてゐる。女神が神の聖室に降つて神託を告げるものと信じてゐた譯だが、此場合の女神は「使ひ神」の性質を有し、ギリシヤ信仰でいへば Hermes 神、ローマ信仰でいへば Eros 神、近代信仰としては angel に當るものである。イシュタル女神の場合、眞に神託を降す神はニンギルス神となつてゐる。が、實際信仰する人々に對して神託を解き聞かせるのは神婦で、彼女等が神の聖室に居て、それに神託が降る譯で、此聖室が眞個の意味の Harem である。

神託者といふシュメルの原語 ensi はバビロン語で sa'ilu といひ、「問ふ」「叫ぶ」などの意味があり、其點に於て前に出した en と同じ事となる。而して、之が一個の役目の名としては神託を伺ひ知る事を指す。又別にバビロン語の方には「父」又は「祖先」といふ意味もあるが、元來のシュメル語の解釋から行けば en-me-li で「生命の主」「高所にある生命」といふ意味であるから、要するに之は女神又は神婦を通して祖先より與へられたる生命の源泉への祈願讃仰に外ならない。

然らば、其祖先又は死者は、一體何處にゐるか。換言すれば冥界とは如何なるものかといふ事だ。元來シュメル又はバビロンでは、世界は山形をなしてゐたと信じられ、現に其模形さへ遺物の中から發見されてゐる。

世界を指して kur-kur といふが、kur とは山の事である。而して此「山」といふ語を二語重ねる事はシュメル文法に於ける複數形構成法であり、此「連山」が即ち「世界」を現はす言葉であつた事からしても彼等の原始的世界觀を率直に示してゐる。

死者の世界は、此宇宙としての大なる山の端にある洞穴を通つて地下に入ると信ぜられ、其暗黑の世界が「冥府」であり、此暗黑に光明を與へるものは月や星の光りである。大洪水の時、人間の大祖ウタナピシュテムが訪ねて行つた冥界も、ギルガメスが訪ねて行つた冥界も、亦イシュタル女神が若き愛人たる太陽神タムムズを蘇らせやうと

訪ねて行つた冥界も皆此場所であつた。死者はその冥界にあつて年を經ると、遂に天へ昇つて神となる。

彼等がシュメルの沖積層土の土地へ都市を構へた時も、其平地の中央に山を造り、之を e-kur（山の家）と呼んで、人間界より天界への架け橋となるものと信じ、人間の死體をも亦其エ・クルの地下層に埋めてゐた。此事はフィラデルフィア大學の調査隊のニップル市發掘の結果明かとなつてゐる。然し此埋葬方法は果して原始的か否かは疑問である。シュメルに於ては家族の死體を居住の地下に埋める習慣もあつたから、此方が都市的な信仰中心である エ・クルの下に埋める事より、より原始的であるらしく考へられるではないか。

二

宗教が、單なる神と人との交通であり、又自己の部族内部のみの問題であつた間は、夢や、神がゝりや託宣などによつて神と人との關係を完了し得たとしても、社會が更に宏大な集團となり、是等集團員全部に關聯を求める必要が生じ、又其廣い地域と多數の人々の統制が必要となつた時には、前のやうな女性的な夢判斷や、神憑り、神前舞踊のやうなものは、單なる神殿内部の信仰的機構の一に過ぎなくなり、之に對して、外部的に神の力を一般大衆の結合にまで延長利用しなければならなくなつて、信仰上の女性の中心的地位は、遂に男性に讓らなければならなくなつた。

シュメル初期の神制が、前記の年代記や大洪水神話に語り殘されてゐた時代のものには、An（天、ウルク市）En-lil（冥界、大地、ニップル市）En-ki（水、エリド市）Nin-hur-sag（山の女神、ウル市）の四神が各々其持場々々を有してゐる事となつてゐたが、此連立的狀態は、是等の神々がそれ〴〵の都市の主神である事により、實はシュメルの政治狀態の反映であつたとさへ考へ得る譯だ。されば各都市の統治的地位にも種々變遷があつた如く、神々の地位や相互關係にも亦、都市の政治的相互關係と或る時は結合し、或る時は隔離されたまゝ、種々な變轉のあつた事が知られてゐる。

年代記又は大洪水神話では、天は An 神の受持で、en-lil 神は大地の守護神となつてゐる。然るに其一方 en-lil 神は冥界の神として知られてゐた。此神を主神としてゐたニップル市といふ名は、後代の稱呼で、昔時は en-lil-ki といひ、直接 eden 神の町といふ名で呼ばれてゐたのだ。

シュメルに於ける冥界思想は、洞穴の奥の暗黑の世界で、其所には暗黑の水を以て滿されてゐた。ウタナピシュテムが冥界を越えて神を訪ねて行つた時にも船に乘つて行つた。此暗黑の水は、夜の空、夜の水の象徵で、其暗黑の世界の中で死者が死後の生活を營んでゐる。然るに、茲に甦生の思想が呼び覺まされるや、彼等の信仰は、太陽が一旦夜の世界を通つて朝の光明の世界を齎らすが如くに死から甦生し得ると信じ初める。又、太陽が冬の悲愁を極めた幽暗の季節から、陽春の光輝の太陽として新粧し來るとも信ずる。此最後の思想から、イシュタル女神が愛する太陽神タムムズを甦生せしむるために冥界に降るといふ神話が現はれてゐる。

ところで、此甦生の水はエリド市の主神 en-ki（e-a 水の神殿の神）の支配する神水であるといふ。エリドの町は昔日バビロン地方の最南でペルシヤ灣頭の海岸都市であり、Berosus の殘した傳說によると、海から來た鰐魚の神、オアンネスが此エリド市に上つてバビロン人に第一の智識を與へたといひ、此市がバビロン全土の文化の根源とさへ考へられた。從つて近代の學者の中にも、バビロン文化はエリド市を介して海から入つたといふ說が出る所以でもある。

此エリド市の水神の水が死者を甦らせる水で、ペルシヤ灣の水が冥界の海を意味するとさへいはれるが、更に死

者が此水で清められて後、天へ昇つて天神の坐に配せられる。此天神は ab 神の本居で、ウルク市の受持となつてゐる。

夜の世界の光は月である。此月神は新月の形で表はされ、シンと呼び、此月神を祀つた都市はウル市である。ウル市は古くは山のニン・ハル・サグ女神を拜したが、此月神をも亦拜した。尙、夜の光として重要なものは星だが、人が死んでから天に上つて星となる。年代記のウルク國の王ルガル・バンダが死後に mul-dar-lugal 即ち「王の變光星」となつたといふのも其信仰の一の現はれである。

かくの如く、都市が主とする信仰の盛衰にも種々なる變遷があり、之が、其都市の勢力消長にも影響を與へる事が大きかつた。然るに此關係に對し單り超然としてシュメルとアッカド、降つてはバビロン、アッシリア時代等を通じて特別な權威を有したのはニップル市のエン・リル神であつた。

西紀前三〇〇〇年頃のラガシ王朝の文書によれば、此ニップル市は、此市を中心として南北に對峙したるシュメル人とアッカド人の兩方から共に崇拜され、各都市の王權は何れも此ニップル市のエン・リル神から授與されると信じられて居た。

其時代に於て各都市に主長者あり、其主長者が同時に政治と信仰との兩面を統轄してゐた事は幾度もいつた通り、之れ亦ニップル市も其範を出でゝゐないに拘らず、特に此ニップル市の主神エン・リル神だけが、「神々の王」として其各都市の信仰の上に君臨するが如き觀を呈して居たのは何故であつたらうか。

一三

ニップル市が東南のシュメル人の都市と西北のアッカド人の都市との、丁度中間に介在してゐたが、此中間的存在は必然的に經濟的にも此ニップル市を中心者的地位に置かしめた。

由來、東南地方は豐饒にして農産に適したのに對し、西北地方は、農業も元より盛んであつたが、南方に比して牧畜木材鑛産物が豐富だつたから、其中央に介在するニップル市場を通して活潑なる商取引が行はれた。此事は恐らく其市のエン・リル神の祭日の如き宗教的行事とも直接に關聯があつた事とも思はれる。

其結果としてエン・リル神殿の饒富は勿論であるが、それより玆に注意したいのは、ニップル市の pa-te-si それ自身が「大商人」としての地位を保持してゐたといふ事である。

此事を論證するために、先づニップル市のパテシの名が出てゐる文獻から示して行きたい。次に出したものは恐らく西紀前三〇〇〇年前後の資料と思はれる。

1 dingir en-lil	聖エン・リル神（に捧ぐ）
2 ur-en-lil	ウル・エン・リル
3 pa-te-si en-lil ki	エン・リル市のパテシ
4 nam til-la-shu	その生命のために

之を譯すれば、「聖エンリル神に捧ぐ、エンリル市のパテシなるウル・エンリルの生命のために」となる。之は神に獻じた瓶に刻してあるものだ。

然るに、此パテシであるところのウル・エンリルから他の神に捧げたものがある。

1 dingir ininni-edin	野のイニンニ神（に捧ぐ）
2 ur-dingir en-lil	ウル・聖エンリル

3　dam-kar-gal　大商人
4　a-mu-ru　之を献ず

「野の神、イニンニ神に、大商人ウル・エンリル之を献ず」といふのである。

シュメル語では名詞の次に來る詞は前者を形容する。此所に出てゐる如き例では、其人名に對する身分を示してゐる。即ち前例ではウル・エンリルの身分がエンリル市のパテシであること、、後例では、其ウル・エンリルが「大商人」である事と同じである。然るに此ウル・エンリルのために他の商人から神に對し献納した例があり、其類似の例のため、王を果して「大商人」といつたか如何か疑はれるかも知れないから、少しくどい樣だが、論證の確實のために其資料を併せて出して見る。

1　Nin-lil　ニン・リル
2　abu-en-lil　アブ・エンリル
3　dumu lugal til-dug　ルガル・チル・ヅグの兒
4　dam kar ge　商人の
5　nam til　生命のために
6　ur dingir en-lil　ウル聖エンリル
7　pa-te-si en-lil ki da　エンリル國のパテシ
8　nam til.....　生命のために

之は二つの奉献文を一つの石花石膏の盆に刻したものである。譯文を意譯すると「ニン・リル女神に（捧ぐ）。商人なるルガル・チル・ヅグの兒アブ・エンリルの生命のために。」「エンリル國のパテシなるウル・エンリルの生命のために（ニンリル女神に捧ぐ）」となる。本例の第四行 dam kar ge の語尾の ge は所持格接尾詞である。而して此接尾詞は第三行のルガル・チル・ヅクの所持格たる事を示してゐる。所持格の主語に形容詞がつく時は、其格は主語から離れて最後の形容詞の接尾詞になるのがシュメル語法の特性である。それで、此形容詞の dam-kar 商人といふ語は父なる人の身分を示してゐる事、前例と同じであるから、第二例に於いてエンリル國（ニップル市）のパテシたるウル・エンリルの身分が「大商人」であると解釋するに誤りがないと見ていゝであらう。尚、之が普通の商人に對していふならば、單に dam-kar といふだけである事、第三の例の如くである。然るに pateśi ウル・エンリルに對しては特に dam-kar-gal「大商人」といつてゐる事にも其特殊性が顯はれる。

さて然らば、ニップル市のパテシが特に「大商人」といはれる理由が無ければならない筈だ。之が曩にいつた通りニップル市そのものが、シュメルとアッカドとの中間に介在して得た其商業的地位の現はれで、且つ恐らく此パテシ自身が尚自ら商人的行爲をもなした結果でもあらうと思はれ、又其神殿が一個の市場的役割をなし、同時に商業的契約の神聖を維持させるための役目さへ保有した。ペンシルヴァニア大學の調査團が此神殿の遺跡から數萬の法律文書――經濟的契約文書を含めての堆積を發見し得たのも亦宜なる哉といはなければならぬ。

一四

シュメルの各都市統治形態と其信仰との結合は如何に考へらるべきものであらうか。

シュメルの都市は、文献的資料から見て、王權の樹立と信仰的統制力とが常に結合するか然らざれば相交錯するか、何れにしても兩者常に相關聯してゐたかに見える。そこで其狀態を政治的方面と宗教的方面とから見る事を要

し、之は原始社會研究には缺くべからざる要素と考へられる。

而して、其原始的統治形態を血族組織の上から見ると、西紀前三〇〇〇年代の文獻では、都市主長者の繼嗣は、長子相續が主體であつたから、勿論男系制の成立には疑がないが、其中間に於て傍系的兄弟伯叔的相續をも見る事が出來、之は其血族的殘存形態の内に母系制的色彩の痕跡を見るといふべきであらう。西紀前二五〇〇年代の相續法の成文法に據ると、民間に於て一夫多妻制が行はれてゐたが、其裏面に於て尙母系的色彩を留め、且つ氏族共同體の痕跡をも存してゐたが、之も亦、既に男統的な時代に於て母系的傾向の幾度か復原し來る狀態との一致を示してゐる。尙此關係は、後の家族制度並に神婦制度の究明を俟つて、より一層明かとなる。

男系相續、特に長子相續に於ては血族的信仰中心と集團統制力とが合致する事に於て、史上多くの王權確立の基礎を此時代に見る。シュメル建國當初に於ても恐らく之と揆を一にするものがあつたであらう。

更に原始民族の集團的統制が信仰的に現はれてゐる場合、多くはアニミスティックな或はトーテミックな原始的血族團體として存在し、而して、其信仰的代表者たる酋長が同時に現實生活上の統治的酋長又は政治的主長者でもあり得た。トーテミズムとは、一のトーテムが其團體の代表物として或は祖先として信仰せられる點に於て、血族的祖先神と殆んど共通するが、原始的トーテミズムには普通人格的神視がなく、多くは彼等の身邊に指呼し得る動植物其他無生物等を其儘神聖視してゐるに過ぎない。

若し信仰とは、其信仰するものゝ人格を現はすといふ意味から見れば、トーテミズムは、それを構成する集團人の間に、其集團構成に對する構成員自體としての人間的な、人格的な自覺が充分に發生しない時代の產物なりともいひ得ようし、又其程度の文化の表示とも見る事が出來るであらう。

然るに、此種の原始血族集團が、血族的に明確な自覺を持つに從て、其代表的信仰を其血族的集團の直接祖先とし、更に進んでは其血族的祖先としての人格を與へやうとする。

シュメル人はトーテミズムを有したか如何かは今直にいふ事が出來ないが、例へ、あつたとしても文獻時代には既に消えてゐた。尙彼等の間に祖先崇拜思想の濃厚であつた事は既にいつた通りである。然し其祖先崇拜思想も既に氏族的或は部族的といふやうな狹い形から脫出してしまつて、寧ろそれは民族的立場に於て、都市的祖先神として現はれてゐた。更に彼等の天體崇拜に至つては、もつと廣汎な地位を現はしてゐた。が、只其中に過去のアニミスティックな殘滓が尙多く混入してゐたのも事實であつた。

此時代に於ては、彼等シュメル都市の住民達が、原住地を離れて此地方へ定住してから既に悠久に近い年月が流れて居た。其初期より、漸次共同體的集團としての村落又は小都市を形成し、各々之が統一的傾向に進まんとしつゝも、幾多の消長があり、後、其共同體も崩壞し初め、シュメル時代末期には、市民は血族的にも分裂して小家族的となり、其狀態に於て是等の小家族的集團の市民がそれ〴〵の都市を保持し、其各々の都市が一單位として相互的に近親的血族的觀念の上に民族的結合をなし、加之、かくして形成せられたる各都市相互に於ても亦、それを代表するそれ〴〵の神々が、互に親子、兄妹、夫婦等の近親的關係にあるが如き意味に於て、神々の國の聯合が考へられ、同時に地上に於ても亦、其神を通して一の都市聯合が考へられてゐたのである。

シュメル・バビロンに於ては、各都市が各別の主神を有し、之が主として天體又は天象と關係してゐた。

之に就て、或る特定の都市が特定の天體又は天象を限つて自己の主神として選び取り、之を他と混同しなかつたのは何故であらうか。此問題に就いて尙、吾人は遂に適切な回答に接してゐない。

シュメル人は、其土地へは、他から移り來り住んだ人類であり、當時既に相當に高い文化を有した。彼等の信仰記錄によると、彼等は靈魂崇拜を有し、特に祖先崇拜が之に強く結合してゐた。

然るに、彼等の生活の進歩の結果、天象の觀察は益々精透となり、遂に彼等の信仰の中にその影響を一層及ぼし、在來の信仰の上に、新たなる天體崇拜が結合され、天の悠遠さが遂に人類の靈魂の上に再生の機運を與へ、更に永遠の生をも享けしむるとの見解にまで到達した。

都市に與へられたる各樣の天體信仰的關聯は此時代の過渡的樣相を語るものとして、時代的にも各都市構成と其信仰成立の相關々係の研究が寧ろ今後の問題となり得るものであらう。

一五

今迄は、統治形態と信仰形態との相關々係を見たが、次に統治形態を主體として、史料の不足を補ふために、先づ神話傳說の上から原始的統治狀態を求め、次いで考古學的資料、歷史的文書の上から其變化の迹を尋ねよう。

茲で問題とし度いのは、傳說上に於ける大洪水以後の第二王朝ウルク王朝の事で、此王朝に現はれる各帝王が、一王朝を組織してゐるに拘らず、各々別な都市の人間であつた事だ。

彼等は、王朝建設の都市ウルク市に對して全然別な都市――都市單位でいふなら彼等は王朝に對しては外國人に過ぎないのに、如何なる理由で次々にウルク王朝の王位を繼承したか。此事は、原始時代のシュメルの王位繼承制度として特異な現象とも見える。

ウルク王朝の第一王たるメスキエンガシェル王がウルク市の主神 e-anna（アンナ神神殿）の最高神官たる en であり、同時に主長者 lugal であつた。此第一王は王とはいへど都市の主長者でなく單なるアンナ神のエンであるだけで、ウルク市は未だ建設されてゐない。次いで立つた第二王は第一王の兒でエン・メルカルといひ、之がウルク市の建設者である。さうすると、市が建設されない前にアンナ神の神殿なるものが既にあつたのだ。しかも此第一、第二の王は直接の父子關係であるから、此エ・アンナ神の信仰關係は古い血族的系統の信仰的繼承樣式を暗示してゐるものであらう。

然るに、第三王以下は、上述の父子關係とは全く趣きを異にする。

第三王はルガル・バンダである。バンダとは「小供」といふ字と同じで、やはり若い者の意味だ、ラガシ王朝時代の職業的文獻でも之が牧羊者の事となつてゐる。此帝王に就ても年代記には特に sib 牧夫といふ職業を附記してゐるから、此王の名と此職業とは特殊關係があるものであらう。

此ルガル・バンダ王は他の傳說によると、自分の生涯の運命を記した土版がニップル市のエンリル神の手元にあつたのを Zu といふ鳥神が盜み出したので、王は其妻の智慧を借りて取返へし、遂に帝王の地位に就いて、「クラブ國のエンリル神たるルガル・バンダ王」dingir en-lil sha kullab-ki dingir lugal-ban-da と呼ばれるに至つた。

此傳承に據ると、王は一個のメデシン・マンとして神を驅使し、人類の運命を左右し其力を以て人民を統治したのだ。此王は kullab-ki 即ちクラブ國の人だといはれた。クラブの原稱は Zeru-unu-ki で「ウルク市と同種」、ウルク市は ses-unu-ki で「ウルク市の兄弟」、皆ウルク市と同系族の都市であつた事が推定される。

第四王 dingir dumu-zi は普通タムムズと呼ばれ、「若き太陽神」としての名で、大洪水以前にも一度出て來る名である。此太陽神は、イシュタル女神の若き愛人で、女神が初め自ら太陽神を殺したのだが、其別離に耐え兼ねて、既に冥路に行つた愛人を蘇らせんと地獄へ降り、七つの洞穴の門を通過せんため次々に寶石を初め遂に下着まで脫

し、全裸となつて暗黑の世界に行き、地獄の女神 allutu に懇願して、漸くタムムズ神を甦生させるといふ哀艶限りなき神話の主人公である。年代記に據るとタムムズは漁士で ha-a 國の人といはれる。ha-a とは「水中の魚」といふ意味で、水の都エリド市の別名だから、タムムズは此市の神でもあるといふ。

第五王はギルガメスである。此名は有名なギルガメス英雄譚の主人公である。彼の父は kullab 市の en であると、年代記に特に記してある。此クラブ市は第三王ルガル・バンダの出身地と同じだが、第三王の事に就いては年代記には何も書いてない。

ギルガメスの父がクラブ國の主長者 en であるから彼自身も亦父と同樣クラブ國出身と見ていゝのであらう。兎も角、斯樣にウルク市の人間でない彼がウルク市から選ばれてウルク王朝の帝王となつたが、後にウルク市民と爭ひ、遂にはウルク市の女神イシュタル女神とも爭ふに至り、此爭鬪がギルガメス傳說の骨子となる。

ギルガメスといふ名を原字の儘讀むと、gis-bil-ga-mesh となる。之を何故ギルガメスと呼ぶかといふと、アッシリヤ時代の文獻には gi-il-ga-me-esh とあり、更に之とは別に、ギリシヤに傳へられたものがあり、それは Aelianus の De natura animalium. XII, 12. に出で、その方の名は *γιλγαμος* となつてゐるところから、學者は、之等に據つてギルガメスと讀んでゐるのだ。

尙ギルガメスといふ名は、シュメル語で「祖先」の事だ。此名の意味からいへば、彼は人類の第一祖でなければならぬ筈だがさうはなつてゐない。ギリシヤの傳承ではギルガメスの父はマスコロスといひ、其娘が對手の不明な兒を姙んだといふので、祖父が其兒を殺すべく、赤兒のギルガメスを母の手から奪はんとした。そこで母はギルガメスを城の高塔の窓から放り出すと、意外にも鷲が翼の上に載せて地上に降ろし、牧人が之を拾つて育て上げたといふのだ。

シュメル傳說だと、ギルガメスの母は nin-sun で父は太陽だといふ。此傳承に於て、不明の父によつて出來た兒を殺すといふのは、族內婚から族外婚への過渡期に於て、外部から入込む男性を容れやうとする女性と、之を拒否しやうとする父祖伯叔側との反撥的關係に屬々殘る種類の傳說であり、ギルガメスは母の部族に入るを許されず、しかも父の部族を知らざるものと見做され、新たなる男系族樹立の機會を造つてゐるものである。尙之と共に注意すべきは、此ギルガメスの前の王であるタムムズも亦母方の名稱を繼いでゐる事だ。

タムムズ神の母は dingir sur-zi(ze-ir-tu) と呼ばれたから(Zimmern, Der babylonische Gott Tammuz, S. 13.) タムムズ神は、其名を母方の稱呼に受けて dingir dumu zeirtu 即ち「ツェルツの息子神」と呼ばれ、又 dingir dumu-zeirtu-ra-ge「ツェルツの息子神」とも呼ばれたのだ(Macmillan, Rel. texts 32-3) 是等は何れも母系繼承の片鱗を示してゐる。但し、歷史時代の文獻の多くは男系的記錄を主としてゐる事勿論である。

一六

今迄記したウルク王朝の各帝王を見ると、第一王メスキンガシェルが王朝の基礎を築き、其兒エン・メルカル王が初めてウルク市を建設したが、それに次ぐ第三王のルガル・バンダ王は Kullab 市から、次のタムムズ王は Haa 市から、更に第五王のギルガメス王は kullab 市の市民を母とする孤兒から出てゐる。しかも第五王ギルガメスが王者となつた動機は、ウルク市の市民から選ばれたものである。但し此推擧の制度は人民投票の如き形式でなく、ニップル市の主神エン・リル神の神託として即ち神から選ばれたものといふ形で現はれてゐる。

エンリル神はニップル市の神であるに拘らず、當時の神々の王として最高の地位を示めてゐた事が之でも判るが、

當時の帝王は皆此エンリル神に祈願して選ばれたる王としての位地を得たいと腐心し、其祈願文の遺物は尠からず發見されてゐる。

さて年代記に於けるギルガメスに就ては、傳承の一に次の如く記してゐる。

shar-ru-tam sha ni-shi　　人々の王國を
i-shi-im kum　　汝に授くべき命運を與ふ
dingir en-lil　　聖エン・リルより

（B. S. 15282. Col. 632-33. Poeble Vol, IV. 123 p.）

此事はギルガメス傳說から見て、同族國たるウルク市の國難に際してギルガメスが呼ばれるのと一致する。

古代國家に於ける、部族々々の併立に際し、之が聯合又は結合の際全部への統率者を選ぶ時には、其主長者等が相互に適任者と思ふものを推擧又は選擧の形式を採つた事は、社會史研究の上で其例を見てゐるが、シュメル古代に於ては、人民自ら王を選ぶといはないで、神に選ばれたといふ形式を採る事は注意に値する。

一七

次に、具體的なる發掘遺跡並に遺物の上から都市構成並に統治上の狀態を研究して見よう。

前世紀中葉頃から徐々に行はれたメソポタミヤ諸地方の發掘調査が、近來引續き各都市の遺跡に及びニップル市、キシ市、ファラ、ウル市、アル・ウベード、ウルク市、バビロン市、ウルク市、テロ等殆んど其重要地點を次々に調査して來てゐる。

其結果、特に最近ウル市を跡る四哩のアル・ウベードの遺跡調査の結果、其土地を聚落構成のために撰んだ原始狀態が明かとなつた。

先づ、河水によつて沈澱した沖積層土が、河岸に接して漸次堆積し來つた時、其所に出來た小丘を求めて小聚落が出來る。其居住形式は、河岸に豐富の蘆を編んで蓆とし、それに泥を塗り之を壁から屋根へ續けて、大きな半圓形の筒のやうな形に造り、それに木の戸を付け、床には天然煉瓦を敷いた。

其頃には既に家畜としての牛、羊、山羊、豚等が居た。裸麥が作られ、それを粉にするためのひき臼があり、又魚漁もした。道具としては主として石器で、小刀、打刀、矢の根があり、フリント又は黑硅石が此材料としてコーカサス地方又は北方地帶から輸入されたと認められる。金屬は銅があつたが尙稀である。穀物を刈る鎌の如きも燒いた土製のものだ。骨器は錐、針となり、色付土器があり、壺、皿などには刻み付けた線狀模樣がつけられた。附近の泥濘地帶の交通には丸木舟が使用された。衣服は羊の皮や、荒い織物を着用したらしい。

死體は屈葬で死後の生活を考へ、食物、手廻品等を死者に供へた。彼等の最後の層に於てシュメル人が入り込んでゐた。然し其後非常なる大洪水に襲はれて彼等の生活が地上から一掃され、洪水以後はシュメル人だけの世界となつた。

シュメル人の世界となつても地域狀態には大差がない。只堆積層土が漸次擴大すると共に、聚落も廣がつて行く、其交通は道路を造ると天然の水路を利用するのとは寧ろ後者を便なりとした、後に堀割が發達したのも當然の結果であり、又周期的の洪水を防ぐ堤防は何時かしら村落の周圍を衞る壁となつてゐた。シュメル人の團體は次々と南方河口近くに移住して新らしき居住を開拓し、水邊の地は尙靜穩であつた。大河に流れ込む小流は灌漑の便を與へ、水邊の草原は家畜を養ふに充分であつて、彼等は滿ち足りた生活に鼓腹し發展した。

彼等に不足したものは、毎年起る洪水への對抗的手段のための堅固なる建築材料と道具となる材料であつた。彼等に、かゝる外部の物資を與へたのは、初めは北方の遊牧民である。彼等は遊動しつゝ次々の物資をも持運んだ。後の商人の名dam-karは遊牧民としての意味を含んでゐた。かくして彼等の間に外部との接觸が初まつた。が然し、是等の事は其紀年がどの邊に置かるべきものかは自分には未だ斷定が付かない。

アル・ウベードに於ける初期の墳墓は大體西紀前三五〇〇年代といはれる。然し此時は既に立派な國家的態制が整つてゐたから、此年代からは直に原始シュメル都市の年代を導き出すのは無理である。

キシ市の發掘からも大體ウル市位の年代が考へられる。

エン・リル神のニップル市は、西紀前二七〇〇年代のアガデ王朝初期にはニップル市は原市の約五倍になつてゐた。五倍に膨脹するのにどの位の年數を要したものか、尙確かに判明しない。

ラガシ市（テロ）の發掘の結果では、西紀前二四〇〇年代といはれるグデア王の建てた神殿所屬の穀倉を發見した時、其地下に於て西紀前二九〇〇年代のウル・ニナ王の記錄ある倉庫の跡がある事が判明した。然るに其ウル・ニナの倉庫を發掘してゐる中に、更に其地下五米の所に又々年代不明の建物の在るのを發見した。之には記錄がないので年代が確定しないが、ウル・ニナの倉庫の建て方と同じく東南方に向けて建てゝある。ニップル市の神殿も亦東南方へ向いて建てゝあるが、是は恐らく天體の運行の方向と關係あるものであらう。そこでウル・ニナの倉庫の地下建造物も恐らく神殿所屬の建てものと考へられ、年代も亦、キシ市、ウル市に次ぐものであらうといふ。

更に我々は Jemidt Nasr の都市を有する。Langdon 教授が之を西紀前三八〇〇年と推定し、且つ、西紀前三五〇〇年には火災のために消滅したといつてゐる。而して此都市から出た文書にニップル市のエンリル神の名等が出てゐる。此都市の推定年代に誤りないとすれば、其文書に名が現はれてゐるエン・リル神のニップル市其他の都市も亦その時に立派な存在を有してゐなければならぬ事となる。さうすると各都市は大體西紀前四〇〇〇年を更に遡るのであらうといふ推定も無理では無くなる。

一八

ウル市に於ける西紀前三五〇〇年の初期墳墓築造時代から、三〇〇年後のウル第一王朝成立時代までの此遺跡は當時の異狀なる文化の進展を物語つてゐる。

第一王朝成立に近いメス・カラム・ヅクと署名ある精巧を極めた打製の黃金の假髮、其他數々の黃金製品、シュブ・アドの竪琴と其四圍に裝飾された神話的繪模樣、モザイクの藝術的香氣の高さ、同じくモザイクのスタンダードと、それに現はした軍隊或は家臣民衆の行列、更に最も瞠目せしむるものは王の墳墓に於ける五十數體の男女の殉死體、かうしたものがそれを含む墳墓や、ニン・ハル・サグ女神神殿の建造物と共に絕大なる問題を提出してゐる。

是等の遺跡遺物により、直に當時の異狀なる富力、其製作的機構、並にそれ等の社會的基礎となつてゐる階級制度、及び其成立過程と發展過程等々。

當時、氏族共同體は既に解體し、宗教も亦血族的祖先崇拜的傾向に併せ、其各部的農村共同體的集團の間に共通し得る天體崇拜的信仰が發生し、其信仰を中心として、神より選ばれたるものといふ形式の下に、諸共同體の中から一集團の主長者が選び出されて其中心に立ち、彼は神の代表者と見做された。

而して各集團の收穫物の餘剩は神殿を中心とする大倉庫に容れ其餘分は外部集團と有無相通ずる方法を採つてゐた。然し此外部的交通は必ずしも平和裡にのみは行はれ得なかつた。かゝる時、彼等は集團的武力を以て他の集團

を襲ひ、直に其神殿所屬の穀倉を略奪し、場合によつては其子女をも略取した。

西紀前三八〇〇年の Jemdit Nasr 文書の中から、當時女の奴隷が存在した事を知り得る。之を文字の上から判斷すると、是等の女奴隷は「山の女」といふ意味であり、何所か山地帶の居住民を連れて來たものゝ如くである。尙兩河地帶に居なかつた「馬」を「山の馬」と呼んで之を所有したが、馬は北方山地帶のものであつたから、奴隷達も或は同一地方或はそれと共通の地帶からでも連れて來たのかも知れない。

それからウル市の墳墓に於ける五十餘體の殉死者は、無理に殺戮した形跡がないから、決して敵人を犧牲にしたものでなく、恐らく其王者への忠實なる家臣であつたらしい。且つ是等と共に當時の絢爛たる富力を觀取する時、其時代には明かに帝王又は王族を中心とする階級制度が既に成立してゐた事を知り得る。

彼等がその墳墓並に神殿其他に使用してゐる各種材料は、彼等の居住附近の產出物でなく、遠くシリヤ、地中海方面から來たものもある。是等と交換するためには多くの物資を要するし、之を略奪するとしても、そのためには多くの武力を必要とした筈で、何れにしても之を自己の手中に收め得るといふ事それ自身が大なる勢力の把持者たる事を示す。

恐らく此時代は、既に近接都市を征服して、之に對して貢納制度を課して居たであらう。然らざれば、如何にしてかゝる暴富を有し得たかを考へる事が出來ない。且つ此貢納制度は當時の農村共同體の上にかゝつてゐたであらう。

更に此時代に於て、ウル王朝は lugal と patesi の兩稱號を並用してゐる。此事は重大なる王者の權威の增殖を語つて餘りある。然し我々は此ウル王朝に就いて尙殆んど多くの事を知らない。次にラガシ王朝の歷史によつて、周圍の都市に於ける王者的地位の變遷と都市勢力の消長を簡單に述べる事とする。

ラガシ國王が他の都市を征服した結果、他の都市の patesi の地位に對照的に自己の權威の大を示さんために大パテシの稱號を以てした事は既に記したが、彼等は遂に他のパテシの地位を貶して自ら其神のパテシたる事を呼號した。かゝる例は西紀前二六〇〇年代のウルク市のルガル・ザギシの記錄にもある。

萬國の王者、ウルクの王者、ルガル・ザギジ。國の王者、アヌ神のパテシ。ニダバ神の大人（ル・マブ）にしてウクシの兒、ウムマ市のパテシ云々

とあり、此ウルク市の王にして其主神のパテシが自ら其被征服都市たるウムマ市のパテシと自稱したものである。此事實が同時代のアガド國のサルゴン王の記錄にも現はれて居り、其誤りならざるを示してゐる。即ち

ウルク市の王、ルガルザギジはウムマ市のパテシなり（Poeble. ibid. vol. V. pl. 34）

とあり、しかも同じ記錄の中に「クルクの王ルガル・ザギジは倒されたり」とも記され、昨日の征服者が今日の被征服者となりし有爲轉變を見せてゐる。

ラガシ市のエアンナツム一世王（ウルニナ王の孫にしてエンテメナ王の父）西紀前二九〇〇年代の記錄に、

ラガシ市のパテシなるエアン・ナツムのために、彼を愛せるイニンニ女神は、ラガシ市のパテシの權にキシ市の王權を加へしむ（Barton, The Royal Inscriptions 33 p.）

とある。しかも之は、エアンナツムが元來ラガシ市のパテシであるのに、其上にキシ市の王權を專斷したのであるが、それをキシ市の主女神であるイニンニ女神から神託を受けたといふ、古い樣式を踏襲したものである。

次に此エンテメナ王の弟で、同王の後を繼いだエナンナツム王の記錄を擧げる。

ギルス市の家、イニンナ女神の神官（サンク）イリは、ギルス市よりウムマ市に進軍をなし、イリはウムマ市のパテシたる權を其手中に收めたり

ニンギルス神の境界掘割、ニナ女神の境界掘割を、ニンギルス神の役人（イムグ）がギルス市の堤防よりチグリス河までエンリル神、エンキ神、ニン・ハルサグ女神の「立太子の深淵掘割」（nam-nun-da ki-gar-ra）より暗を縫うて流れしむ。

ラガシ市の穀物は、一グル毎に三六〇〇倍に増加すべし。ラガシ市のパテシなるエンテメナは尙其上に掘割を開きたり。分擔者（gur-shu）として留めたる彼れイル。ウムマのパテシたるイルは土地、耕地を領域となし、此事を嚴重に布告す云々（Barton ibid. 58 p.）

と、之はラガシ國の王エンテメナがウムマ國を攻略した時に、自國の主都ラガシ市の女神の一たるイニンニ女神の神官イリをウムマ市の教主として分駐せしめ、領域を區劃決定し、之をウムマのパテシに任じたるものである。

斯樣にして、被征服者たる其國のパテシを其儘に所謂「本領安堵」として其國に封じた場合と、征服者の家臣を派遣して新に之をパテシに任じた場合とがあつた譯だが、何れにしても、茲に至つては新に封建制的態制が現はれた事を示してゐる。然し是等の論究は別な機會でなければ之を盡くされないから今は省略して次に當時の官人と其任務に就いて少しく之を記さう。

一九

シュメルに於ける古代の國家は神政であつたから神官或は僧侶と譯するものと役人とは必ずしも別なものではない。

前に記したやうに宗教的主長者たるパテシと國家的主長者たるルガルとは詳細にいへば違うけれども、其主長者の地位に立つて國民を統制して行つた事には相互に異るところがよい。從つて此兩者の下にあつて働いてゐたものが共通した任務に從事してゐたのも亦當然といふべきである。只一方は國の主長者が神の奉仕者たることを、より重大な任務としたパテシ時代に於ては、其下に働く神官が同じく主長者の意に基いて國務に從事したといつても、結局は神の奉仕者たる位置がより大切となされたものである。

例へばラガシ市の主長者エンテメナの下にあつて神領地の農夫を統率してゐたのは矢張一個の神官である。其官名をsutugと呼び灌油の役を司るものである。油をそゝぐといふ事は西方アジアは勿論埃及にもあり、基督教にも傳承された習慣である。sutugといふ語は一方で「蘆」をも指し、蘆はシュメルでは元來聖物の一で、神殿を之で造り、聖具も亦多く之を用ゐたのだが、此蘆の管も亦聖油を灌ぐために用ゐたものと考へられる。埃及の十八王朝時代の墓の浮彫に此灌油の圖が見えてゐる。それによると僧侶が細長い瓶から油を管で採つて他の頭上に振りかけるところを表はしてゐる。シュメルやバビロン其他でも同樣な狀態でやつた事が、それ等の關係用語からでも推察出來る。

是等のsutugが同時に收稅吏である、エンテメナ王の楕圓形平面板の記錄に據ると

udu u-sam　羊を持ち來れり
udu ba　其羊は
udu šag-ga-bi　良き羊なり
lu-ba-ta tum-mu　貢納者より收受せり
šutug-gi-ne　シュタグ官等は

ŝe-gub-ba sug-ki-a e-aga	畑の立穂のまゝ計量し
ŝutug-bi-ne	シュタグ官等は
e-ŝe-gub-ba-bi	其所在の穀物倉庫に
suk-ki-a ni-nu-ru	畑の、之を取れり

尙是等の外に sangu 又は ŝangu といふ神官の一階級があり、之は恐らく普通の神官一般を指すものかと想像されるが、此 sangu が軍人又は役人と同樣に市民から貢納を收受してゐた。エンテメナ王の記錄の一節に

ŝe sangu-sangu-ne	穀物を、サング神官等は
erim pa-te-si-ka-ge	パテシの兵士と
e-bu	分領せり

茲に出てゐる erim とは兵士又は役人、常務者等をも意味し、彼等神官、兵士役人等が相共に國家の役人として食祿を食んでゐた事が之で證明出來るであらう。

當時の國家の收入は一時的には敵國の侵略によつて國富の增殖を計る事ではあつたが、平常は王領地に於ける一般產業と封國及國民の貢納であつた。それは決して農業にのみ依るものではない。ラガシ市の末王ウルカギナの記錄によつて見ても、農民以外に牧畜業者が羊毛の刈込時になると特に其中から良質にして純白なものを撰び宮殿に運んで其所で羊毛を刈込んで納付する。ウルカギナ王は彼等に銀五シクルを與へたと記してあるが、之は王の仁政を頌した記錄であるからだが、是等は勿論買入れでなく、納稅の方法として平常のものであつたと推察せられる。牛や驢馬などは其儘納付せられた。

漁夫からは、王の權力によつて開墾した堀割に對し漁業權を許して特許料としての納稅を收受した、養魚場を設置した事は古く初代のウルニナ王（二九〇〇年代）の記錄に見えてゐる。又ウルカギナの法令に魚漁の禁令が出てゐる。山村からは建築用材として木材鑛物等の納付も亦多かつた。神殿の女神への供御となるべき夥しき畜獸、食物、牛乳等が納められ、是等は主として直屬の牧場、農場で調へられた。是等の外に王宮附の種々の建物にも亦農地があり、其所からも種々な物資が納付されてゐた。是等の國家の收入と其多くの役人への支出等の記錄の多數があり、其時代の經濟狀態をよりよく究明し得る材料も手元に來てゐるが、それ等に就ては又別に詳細な論證を必要とするから、次の機會に讓る事とする。

（追錄）此時代を代表する發掘文書は、茲に屢々利用された帝王文書の外に、之より、より一層重要だと思はれるのは當時の民間文書である。此民間に於て作製された文書は、主として其當時の賣買貸借上の諸契約書で、之が當時の法廷たる神殿中に保管されたるものが其神殿を發掘した結果、保管された文書の多くも亦同時に發見されたものである。

古き歷史學が、帝王の統治的歷史のみを以て終始してゐた時代は兎も角、社會史的な研究は上述の資料をマスターする事が寧ろ絕體的な必要事で、社會の上部構造としての政治、法律等と併せて、其統治的强力が實際社會に如何なる影響を及ぼしてゐたか。そして實際社會が如何なる狀態に於て變化し進展して、次の態制へ移行したかを茲から具體的に把握しなければならぬであらう。

本稿で觸れ得た帝王文書の外に、民間文書としては、西紀二千七、八百年以前までも遡り得る文書として、特にラガシ市遺跡から發掘したもの、又は、ニップル市の南方三十五哩程のシュルパク市の遺蹟に當る、ファラから發

掘した文書などは、特に經濟的に頗る重要性を保持する。

それ等の文書の中には、多くの經濟的關係文書を發見すると共に、かゝる古代に於て、經濟上の各種契約を法律文書として作製し其確實性を充實せしめ得た當時の高度な社會的發達と共に、此程度に進んでゐた市民一般の經濟的地位と、其所に至る諸過程、並に斯る燦然たる文化が、其後其地域に於て突然と中斷し、或は、何故、他の東洋諸地方に殆んど多くの影響を及ぼさずに終つたか。是等の諸點こそ、眞にアジア的特質として重要なる所なると共に、尙他の一般經濟史に於ても亦充分考察を必要とするものであらう。

ファラ市の遺蹟は、獨逸の東洋協會がデリツチェ教授指導の下に、一九〇二年に初めて發掘し、其後屢〻行はれた。此出土品中、古い時代の部分は、多くトルコのイスタンブール博物館に所藏される。其一部分の二、三百個は獨逸のダイメル教授の手で發表され、尙一九三一年以後フィラデルフィア大學のクラマー教授が土耳古政府の許可を得て之を調査し、又フエルチュ氏の手で目錄も發表された。

ラガシ市遺跡發見の文書には、ラガシ王朝末期西紀二七〇〇年代のルガルアンダ王及びウルカギナ王並に其后妃シャグ・シャグの宮殿關係往復文書があり、ハーヴァード大學のヒューゼー教授の手で發表された。譯文が無いので其謄寫によつて井上の解讀し得た範圍では、宮殿所屬の物資輸送、收納關係文書や、勞役者の支給記錄など多く、中には粘土版の兩面約二十欄三、四百行に及ぶ長文のものも尠なからず。且つそれに計算書の附いてゐるものも多々ある。

Maxwell H. H. Macartney and Paul Cremona; Italy's Foreign and Colonial Policy (1914–1937), 1938.

山本　登

伊太利宰相ムッソリーニ自身の言葉を借れば一九三六年五月エチオピア攻略の完成は伊太利の地位を所謂「滿足國」或は「持てる國」の一にまで引上げたものであり、且つ又、それはファシスト帝國乃至は第二ローマ帝國の創設を意味するものであつた。英・米・佛・蘇の諸列國に伍して伊太利が「滿足國」としての實力を有するか否かは此の特殊語の持つ意義の解釋如何により自ら異る所であり、更に又一定の實證的分析を俟つて始めて明らかとなる所である。然し兎も角最近に於ける國際情勢の變遷下に於て伊太利が日本或は獨逸と共に有力なる現狀打破派の一國として換言すれば新興勢力の一として活潑に活動し來り、又しつゝある事は否定し得ざる事實である。然かも世界大戰を通じ又大戰後に於て其の關係した一切の國際的問題に際し常に事志と反し戰勝國の一であり乍ら不遇の地位に陷れられた同國がファシストの擡頭と共に漸次力强い回復の歩を進め遂に今日斯かる一勢力を築くに至る迄は對內的又對外的に誠に苦難の途であつたと云はなければならない。從つて本書に依り一九一四——三七年に亙る期間に就いて後者即ち伊太利の對外政策の變遷の跡を顧る事は頗る興味深きものがある。

伊太利の對外政策乃至植民政策は其の地理的狀勢の影響を蒙る事大なりと謂はれる。即ちアルプス大山脈を以て